

# 日本・カナダ女性研究者 交流事業参加レポート 1



ますこ かよ  
増子佳世

聖マリアンナ医科大学 生化学教室  
専門：内科学、リウマチ学

## 1 はじめに

今回、日本学術会議およびカナダ王立協会（RSC）による平成20年度「日本・カナダ女性研究者交流事業」による派遣という形で、カナダ Alberta 州 Edmonton、Quebec 州 Montreal、Ontario 州 Ottawa という3都市の大学や研究所を訪れる機会に恵まれた。私自身が医師であり医学分野の研究をしていることから、主に医学部関連の研究施設を訪問したが、3つの州、また英語圏とフランス語圏と、歴史も環境も異なる地域や大学を訪れて多くの女性研究者と意見交換したことで、カナダという国の多様性と受容性の高さを実感できた。言葉にできないレベルで学んだことも多いが、ここに今回の訪問の概要を報告させていただく。

## 2 カナダ訪問

### 2月26日：Edmonton

初めてのカナダ。雄大な景色が見渡す限り、川面

すらも白く凍りついているのを機内から眺めながら、バンクーバー乗り継ぎでエドモントンに到着した。

最初の訪問先は、Alberta州Edmontonにある、University of Alberta(現地ではU of Aと呼ばれる)医学部である。空港に出迎えて下さった生理学教室准教授 Dr. Christina G. Benishin の案内で市内へ。早速その夜(気温-20度位)、大学院生4人(すべて女性)を交えた夕食会を開いて下さった。彼女たちのキャリアについて聞きながら女性が研究することについてさまざまな話をした。日本では出産後に研究職を続けることには困難が多く、やめざるを得ない場合もあると話す、カナダでも難しいところもあるが、家族が家事をシェアするのは当然との言葉などが返ってきて、彼女たちの熱意が感じられた。

### 2月27日：Edmonton

今日は高校訪問および高校生向けセミナーの予定であったが、Edmontonでは教員会議で全校休校とのことで近郊まで車で行くことになり、時間的にタイトな日程となった。

Edmontonには、経済発展によりここ数年で非常な数の人口流入があったそうで、今回訪問したElk Island Public Schoolsも、広大な新興住宅地Sherwood Parkの一角にあった。カトリックとプロテスタントの校舎が、合間の共通部分を挟んで並び立つ施設のうち、プロテスタントの側である



写真1：University of Albertaでホストを務めて下さった医学部生理学教室准教授Dr. Benishin。

Lakeland Rigde Schoolを見学することとなり、宗派によって教育が異なる一例を垣間見るようになった。

学校では、科学技術部長Ms. Edna Danaが校内を案内して下さいました。幼稚園から中学校までが同じ校舎で学ぶこの学校では、当日は6-9年生はスキー教室に出かけ、Kindergartenはちょうどpajama dayで生徒も先生もパジャマなしそれに近い格好で授業をしていた。この学校では2007年に助成金を得て、中学1年生に相当する7年生に一人1台のラップトップPCを3年間貸与するなど、学習に関わる情報を活用するシステムの確立に力を入れており、黒板ではなくタッチセンサ付ディスプレイを各教室に設置して、無線LANを用いて授業内容や学習内容をサーバで管理しながらインタラクティブな授業を行うなど、先進的システムをリアルタイムな指導に活かす工夫がなされており、非常に興味深かった。

次に、車で移動してSalisbury Composite High Schoolを訪問、副校長Mr. Ron Horton先生の案内で見学させていただいた。校内には美容室、カフェテリア、自動車整備など日本ではそれぞれ専門の学校で学ぶのではと思われる内容の専用の講義室や店舗がずらりと並んでいて驚いた。障害者のための専用教室も整っており、また上階にはいわゆる普通科の講義室が揃っていた。このように一つの校舎内に、あらゆる個性を持った学生に対して「自分の居場所」が用意されていることが強く印象に残った。今回は

時間および学校行事の関係で、準備していたアウトリーチ活動がかなわなかったが、同行のU of AのHemmings教授が非常に興味深い訪問だったとおっしゃる通り、訪れた2校はいずれもユニークな学校であり、貴重な機会であった。

その後、Alberta大学訪問。まず免疫学教室のHanne Ostergaard教授のお話を伺うことが出来た。教授はKiller cellに関する研究の世界的権威で、そのご主人も著名な研究者であり、「たまたま」隣の研究室で仕事しているのよと笑っておられた。夫妻それぞれのラボは、よく合同でセミナーを行っているとのことで、同じ分野で研究する夫婦のうまくいっているケースと思えた。教授に、「ラボを運営していく上で最も大切と思われることは何でしょうか？」と伺ったところ、教授は「Flexibilityではないかしら」とのことであった。大学院生一人一人の進度やパーソナリティを理解し、それに沿って個別の対応をすることが大切で、そのように心がけているとのことであり、これは多様なバックグラウンドを持つ学生が集うカナダにおいては特に緻密さを要すると同時に重要なことと思えた。

次いで、生理学教室Hemmings教授のラボを訪問。大学院生と昼食。産婦人科との共同研究で臨床検体や動物モデルを用いて実験を行っているとのことで、院生から研究内容の説明を受け、discussionとなった。ラボの見学では、新しく広い実験台を少しうらやましく感じたが、床からの高さが日本より高いのが面白かった。

U of Aでは科学を志す女性をさまざまな面からサポートするプログラムであるWISEST (Women in Scholarship, Engineering, Science and Technology) が1982年に設立されて活発に活動している。Hemmings教授は現在WISESTのマネジメントに従事され、中高生を対象としたSummer Research Programを企画実施されている立場とのことであったが、ただでさえ多忙な職務の中で、夏休みに6週間もの間学生に実験させることは大変と



写真2：  
Lakeland Ridge  
Schoolの玄関。  
モダンで温かい  
雰囲気。

思いきや、「大変だけれど、とても楽しんでいる」とのことであった。教授は、「まだ将来の進路を決めていない中学生への科学教育」を重視されながら、高校生には自ら実験してもらい、結果よりも方法や考え方を身につけてもらうことを大切に指導されていた。プログラム終了時には学生がポスター発表を行い、そこに各ラボの大学院生が批評に来るとの話は参考になった。また、女子には科学の進路について紹介する一方、男子学生には、従来、男子があまり選ばないと思われる分野、例えば看護学のコースを設置しているとのこと、男女とも自分の興味をキャリアとして伸ばしていく機会が提示されると実感した。

15時からセミナー。各研究室から研究者や大学院生が集まって下さった。現在行っている軟骨細胞研究に関する成果を紹介するとともに、日本の女性研究者の現状について、内閣府などの統計データを交えて紹介した。自分としてはやや英語力不足を痛感したが、参加した方々は皆興味を持って聞いて下さり、専門外にも関わらず多くの的確な質問をいただき、時間延長気味となった。

その後、遺伝学教室のCox教授の案内で遺伝学教室のフロアを見学。いわゆる臨床遺伝学の相談窓口と基礎の研究室とを隣接させたとのことで、エレベータを降りてすぐのところは患者受付と待合室、その奥一帯が研究室であった。

Cox博士は銅代謝異常であるWilson病の関連遺

伝子を同定した臨床遺伝学の世界の権威であり、講演で来日されたご経験もあり、さまざまな興味深いお話を伺うことが出来た。彼女が以前に私の専門である関節リウマチに関わる仕事をなさったこともあり、オフィスで有意義なdiscussionをさせていただいた。

夕食は大学内のFaculty clubでHemmings教授、Cox教授、およびポストクの方々（すべて女性）での会食となった。窓の外には、雪景色の中に耳以外真っ白なユキウサギがいるのが見えた。

女性が大学内で高いポストに就くことに関して、日本の医学部は基本的に階層的であり、ポジションが空かない限り昇進はなく、その中で女性が准教授や教授に着任することは未だ難しい状況であることなどを説明したところ、カナダでは女性教授は珍しくないが、逆に横並びで教授が並立することにも、競争が激しく安定しないなどの難しさがあるといった議論になった。また、U of Aで学位をとっても、ポストクとしての研究はアメリカで行う研究者が多く、Edmontonで働く人材は得難いとのことであった。医学部学生の研究について尋ねたところ、臨床と研究をそれぞれ一定期間行う「MD-PhDコース」が設置されているが、「医学部学生はあまりに忙しい」のであまり利用されていないとのことであった。

## 2月28日 - 3月2日: Montreal

2月28日朝エドモントンを出発し、一日がかりでモントリオールに到着。雪が多いと聞いていたが、むしろEdmontonより少なかった。これまでと逆で、フランス語表記が英語より先になったところが新鮮であった。

翌3月1日は日曜日のため大学訪問はなく、McGill大学Redpath museumを見学に行った。フランス語圏で、北米のパリとも呼ばれるモントリオールであるが、McGill大学に近づくと風景は一変し、英国アカデミアの凜とした空気に囲まれた。

Redpath museumは、長年McGill大学の学長



写真3：McGill大学にて、Redpath博物館（右側の建物）を望む。

を勤めた自然科学者Sir William Dawsonのコレクションを元に1882年に設立された、カナダ最古の博物館の一つである。旧港地区の「モンリオールサイエンスセンター」とは異なり、Redpathの方は古き良き博物館といった趣で、映画「ナイトミュージアム」に出てくるような恐竜の骨格標本展示が吹き抜けを彩っていた。個人的には2階の鉱物標本（McGilliteという鉱物も）、3階のミイラなども面白かったが、「ヒトの生首（といわれる哺乳類頭部の乾燥標本）」と、それが果たして本当にヒト由来であるかのDNA解析の詳細な説明も興味深かった。

この博物館では、一般向けのさまざまなイベントと並んで、大学生や大学院生を対象にした多くの教育プログラムを有し、また博物館スタッフによる研究発表も活発に行われており、過去の貴重な資料と未来への情報発信とが同時に活性化している貴重な科学センターであると思われた（しかも入場無料！）。

明けて3月2日、私の研究分野（関節疾患）と非常に近い研究を行っているMontreal大学医学部薬理学教室Dr. Christell Boileauを訪れた。Boileau博士はフランス出身で、流暢な英語はモンリオールに来てからマスターしたそうである。ラボはコンパクトではあったが近くの臨床部門と密接に関わりつつ研究を進めており、医師と合同のdiscussionが活発に行われているとのことであった。その後3人の女性のポストクも交えて昼食をとったが、この研究

室が多くのグラントの元に研究を行っていることが女性研究者の就職に役立ち、安定し一貫した研究が可能となっている状況が感じられた。実際、今回訪問した中ではこのモンリオールのグループが最も女性研究者の問題には楽観的であり、男性と女性とが家事育児を半分ずつ分担するのは当然で、子どもが2～3人いても全く問題ない、育児休暇を男女が分けてとることも一般的、といった言葉が聞かれた。Boileau博士によれば、それはモンリオールが大都市であり、カナダの中でもヨーロッパ的な、オープンな考え方をする街であるからで、ケベック州でも他の街では状況はまた異なるであろう、とのことであった。

午後、McGill大学Life Sciences Complexを案内していただけることになった。癌研究センターMcGill Cancer CenterのdirectorであるDr. Michel Tremblayが温かく出迎えて下さった。McIntyre Medical Sciences Buildingは改装中であったが、隣接するGoodman Cancer Centerと合わせ数多くの研究室が活発に研究を進めていた。重厚な歴史の中から新しい生命科学を生み出す、世界に冠たる医学研究所に圧倒される思いだった。現在行われている乳癌の病因遺伝子について伺ってから、生物学教室教授Dr. Graham Bellの案内でFaculty Clubで今回のカナダ派遣事業についての話をさせていただいた。

その後、Institut de recherches cliniques de Montréalを訪れ、RSCの現会長Prof. Yvan Guindonとお会いすることができた。博士から、この交流事業により、両国の女性研究者が学術的にも交流を深め、科学の発展に寄与していくことを期待しているとのことをお言葉をいただいた。その後、教授の紹介でDr. Jean-Philippe Gratton、Dr. Marie Kmitaとお会いでき、それぞれ血管内皮成長因子および器官発生についての最先端の研究について伺い、discussionもでき非常に刺激になった。

その後、モンリオール中央駅から、カナダVIA



写真4：Ottawa大学にて、Dr. Nahid Azad（左）、  
Dr. Skerjanc（右）と。

鉄道にてオタワへ向かう。

### 3月3日:Ottawa

オタワには予想していた程雪は残っていなかったが、やはり身を切る寒さであった。オタワの建築物は英国式で、RSCのMarie-Lyne Renaudさんの案内で国会議事堂の美しいゴシック様式の佇まいや凍結したりドーナツ運河などを眺めながら、The Ottawa Hospitalを訪れた。オタワ大学医学部のRama Nair教授（社会医学）、Nahid A. Azad准教授（老年医学）に迎えられ、Dr. Azadの案内で研究センターの方に移動しながら、医学部や病院（外来・病棟）も少し見学できた。カナダでも基本的には大学病院受診は家庭医からの紹介によるが、救急の場合は紹介なしで受診可能、ただし、救急外来に到着後、診察まで7～9時間程度待つことはざらだそうである。救急以外にも、例えば癌の手術が数ヶ月待ちとなるケースもあるとのことで、日本とは異なる保険と医療制度との問題がやはり議論されていた。

Ottawa Health Research Instituteに属するEye Instituteの、ギリシャ出身のPIであるDr. Catherine Tsilfidisおよびポストクの女性と話をした。Dr. Tsilfidisは非常に頭の回転の速い女性研究者だが、結婚後、幼い子の子育てをしながら研究した時期はやはりかなりの困難があったと語っておられた。それでもカナダでは、出身国や性別に関わりなく仕事出来る可能性が高いとおっしゃってお

り、教授やPIの方々の多様な国籍からその通りと思えた。ポストクの方は日本滞在経験があり、日本で女性研究者が不利な立場に置かれる例として、夜、男性同士が飲みに行き、それによって女性の知らない仕事上の情報を交換していることがあると指摘されたのは正しいと思った。

その後、他の研究室を回り、生化学・微生物学・免疫学教室Ilona Skerjanc教授を始め、何人もの女性PIと話をしてからセミナーを行った。まず、オタワ大学医学部のOffice of Equity, Diversity and Gender issuesのdirectorであるDr. Azadのご講演では、“Diversity平等なくしてGenderの平等はない”とOffice of Gender and Equityから最近名称が改められた経緯など、オタワ大学における男女共同参画への取り組みを紹介して下さった。このofficeは、性差医療についての研究をサポートし、また医学部の女性医師・教員に対してメンターに関するプログラムを提供するなど、オタワ大学における医療・教育両方におけるequityの問題に積極的に取り組んでいるとのことで、日本の医学部との大きな差を感じさせられた。次に私が自分の研究や日本の女性研究者の現状について講演したが、歴史学教室のProf. Ruby Heapはじめ各教室の研究者や学生など多くの方々が集まって下さり、講演内容である血管内皮増生因子や変形性関節症について臨床面および基礎の面から多くの質問をいただき、充実したセミナーとなった。また日本の女性研究者の現状のデータについても興味を持っていただけたようで、セミナー終了後にも何名かの女性研究者の方々が話しにいらして下さった。

午後は在カナダ日本国大使館を訪れ、橋爪淳・一等書記官から、カナダの科学技術振興や教育事情について詳しいお話を伺った。カナダには数万人の日本人（定住・長期滞在）がおり、また昨年には日本カナダ修好80周年の記念行事があったにも関わらず、カナダの情報が日本にそれほど入ってこないのは、両国の間に基本的に対立軸がなく安定しているため

ではないかとのお話に、なるほどと考えさせられたが、両国の関係は今後発展するであろうと感じられた。

夕刻、RSCの事務所を訪問。DirectorのMr. Darran Gilmourから、RSCの事業や今回の交流事業の意義などについて説明を受け、RSCがこれまでにカナダの科学研究の発展と研究者の交流に果たしてきた役割を知ることが出来た。夜には、今回同じ事業でオタワに到着されたばかりの東京学芸大の佐藤たまき先生とお会いして、カナダに詳しい先生からご研究内容も含め貴重なお話を伺うことが出来た。3月4日早朝オタワ発、5日に成田に帰国した。

### 3 総括

今回私は、日本学術会議およびカナダ王立協会の大変なご尽力により、単なる個人としての訪問では得られない貴重な体験をさせていただいた。

短期間に多くの研究室を訪問したので、個別の課題について議論を深めることは時間的にかなわなかったが、お会いした研究者の方々（男女問わず）は皆国際的に先端に行く研究者であり、少し話ただけで能力の高さを感じられ、その方々が多様な人材を育てながら研究をリードしておられる姿に感銘を受けた。しかしながらカナダ国内においても、訪れた3都市でそれぞれ、女性研究者の困難さに関する認識が若干異なっており、都市の規模やそこに住む住民の多様性により、具体的アクションが異なっているようにも感じられた。

本派遣事業は両国においてまだそれほど知名度が高くないが、短期でも非常に充実したプログラムであることから、日本国内の各地方の、さまざまな分野の研究に従事する女性研究者が参加されるよう期待したい。今後、本事業でカナダを訪問した日本の女性研究者、日本を訪問したカナダの女性研究者が、それぞれの訪問を報告書一報で終わらせることなく、知見を集積して次の参加者や次世代の研究者、

研究活動に入ることを検討中の女子学生等に伝えていける何らかの“場”、また、派遣される女性研究者を支えて下さる方々との意見交換の機会があればと考える。

今回のカナダ訪問は私にとって、医学研究の分野で働く同業者との人的交流や研究に関するdiscussionなど、研究面での刺激となったのみならず、科学教育の一端に携わる身として、教育への関わり方を見直すきっかけとなる得難い体験であった。また、カナダという国が、言語においても文化においても、異なるものを受け容れて調和させながら発展してきた歴史を体感でき、日本人である私が学ぶべきことは非常に多いと思われた。今後は、この体験を個人的なものにせず、さらに両国の科学研究や、（女性に限らず）すべての研究者にとっての研究環境を良くするために活かしていきたいと思っている。

### 4 謝辞

今回の「日本カナダ女性研究者交流事業」に参加する機会をお与え下さいました日本学術会議金澤一郎会長、お茶の水女子大学室伏きみ子教授、RSC Yvan Guindon会長、また参加に際してご助言を下さいました東海大学・日本女性科学者の会佐々木政子教授、東洋大学大谷-金子律子教授、モンリオール大学 Joanne Martel-Pelletier教授に心から感謝いたします。日本学術会議事務局田宮房枝様、カナダ王立協会Ms. Anna BuczekおよびMs. Marie-Lyne Renaudには、今回の訪問に関わる実務のご助力をいただきました。また、各大学でホストをお引き受け下さいましたDr. C. G. Benishin, Dr. C. Boileau, Dr. G. Bell, Dr. R. Nair, Dr. N. A. Azad, Dr. R. Heap,さまざまなサポートをいただきました日本学術会議、カナダ王立協会、在カナダ日本国大使館、および各訪問先の皆様に深謝いたします。